

# ブラジル移民から見る日本と深江

神戸大学 西堀紗世

## はじめに

近年、日本における外国人労働者をめぐる問題はクローズアップされることの多いトピックである。事実、深江にも外国人、特に日系ブラジル人を中心とした多数の外国人が居住、就労している。

ここでは日本における外国人労働者の変遷と、深江におけるその現状を追っていきたい。

## 1 日本とブラジル間の移民の変遷

現在の日本には、多数の外国人労働者が流入しているが、かつては日本人も「外国人労働者」として南米に移住していた歴史がある。

日系ブラジル人とは、主に明治四一（一九〇八）年以降の移民事業で、ブラジルに移り住んだ日本人とその子孫のことを指す。ブラジルにおいて奴隷が禁止され、労働力不足が叫ばれていた当時、仕事を求めて南米に移住することが奨励されたのである。彼らの子孫（二世、三世と呼ぶ）や、また戦後新たに移住した一世は、日系ブラジル人としてブラジルに居住した。ところが、一九七〇年代ごろ、ブラジルにおける経済的苦境がきっかけで、今度は日系ブラジル人が逆に、日本に出稼ぎに来るという事態が発生した。日系ブラジル人による日本への出稼ぎ者の増加にともなって、「出稼ぎ（デカセギ）」という言葉は、「Dekasegui」と表記され、今やポルトガル語の単語として知られている。

ブラジルでは、一九七〇年代前半に「ブラジルの奇跡」と言われる、外国からの借金導入をもとにした好景気が訪れたが、七〇年代後半以降には、ラテンアメリカ全体で激しいインフレーションに見舞われる



写真1 ブラジル移民発祥の地の石碑  
海外移住と文化の交流センター前（旧国立移民収容所、後に神戸移住センターと改称）

など、経済的苦境が続くこととなった。その後一九八〇年代末には、ブラジルはハイパーインフレと呼ばれる水準にまで達し、ブラジルの経済は破綻した。

このような背景で生まれたのが、日系ブラジル人の労働力としての移動、すなわちブラジルから日本への移民現象としての「デカセギ」である。八〇年代前半、戦後ブラジルに移住した一世の婦人から、デカセギは始まった。一世は日本国籍を維持していることもあって、容易に日本で就労ができた。そして、八〇年代後半になると、昭和五九（一九八五）年のプラザ合意で円高が進んだことをきっかけに、日本での就労が外国人にとって魅力的となり、低賃金での雇用を求める日本でも外国人労働者全般への需要が高まったことを受けて、デカセギの幹旋は各地でビジネスとして展開された。こうして移民の流れは逆転したのである。

さらに続く平成二（一九九〇）年、出入国管理法が改正されたことによって移民は増加のピークを迎える。この法改正によって、原則として日系三世までとその家族が、職種の制限なく就労できるようにな

表1 都道府県別在留ブラジル人の割合

都道府県	総在留 外国人数 (人) ①	在留ブラ ジル人数 (人) ②	各都道府県内の総 在留外国人数に対 するブラジル人の 割合 (%；②÷①) ③
兵庫県	107,708	2,435	2.2%
神戸市	48,612	419	0.8%
大阪府	233,717	2,657	1.1%
京都府	58,947	419	0.7%
近畿地方全体	497,649	28,429	0.5%
群馬県	57,072	12,628	22.1%
愛知県	251,823	56,942	22.6%
静岡県	88,720	28,807	32.4%

り、日本での高収入に着目した、もしくはブラジルで職を失った多数の日系ブラジル人が日本へ出稼ぎにくるようになり、日本国内でブラジル人人口が急増した。

在留資格があるブラジル人は、平成十九（二〇〇七）年の三十一万七〇〇〇人をピークに減少したものの、二〇一八年現在は一九万八〇〇〇人と、今なお相当数の在留ブラジル人がいることがわかる。彼らは自動車関連や電機関連、また食品工場などでの仕事に従事し、群馬県太田市、愛知県豊田市や静岡県浜松市などといった、期間労働者を多く雇用する工場の集中地域に居住している。

日系ブラジル人の多い地域として取り上げられるのは、先の関東地方や東海地方であるが、近畿地方では兵庫県も例外ではない。先に挙げた都道府県と比較すると大幅に少ないものの、平成三〇（二〇一八）年六月末現在の兵庫県の在留ブラジル人は二四三五五人（表一②…うち

神戸市は四一九人）で、各県単位の在留外国人中のブラジル人の比率において、大阪府よりやや高い（表一③）。これは、単に神戸市に工場が多数あるというだけではなく、戦前の移民事業の際に出港の地となっていた神戸が、日系ブラジル人によっ

て、自身または先祖にゆかりのある地として認識されている可能性も指摘できるだろう。

彼らは、夜勤や厳しい肉体労働など、日本人労働者が嫌った仕事を引き受けた。短期契約での出稼ぎが目的で日本に渡航した彼らだが、その後多くは日本定住を希望し、永住権、さらには日本国籍を取得することとなった。ブラジルの経済が再び活況を呈している現在でも、来日したブラジル人は日本に定住し続けており、一般にブラジリアンタウンなどと呼ばれる地域を形成している例もある。そのような地域では、ブラジル人を主な顧客としたスーパーマーケットや各種商店が営業している。また、日本に住む日系ブラジル人やブラジル系日本人向けの、新聞や雑誌が発行されている例もある。

## 2 深江とブラジル出身の外国人労働者

第一章でも触れた通り、神戸においても在留ブラジル人は少なくない。本章ではこれについて、戦前からの地域の特徴を踏まえながら見ていきたい。

近代以前から漁村・農村であった深江村は、明治に入ると本庄村の一部を構成していく。そして阪神間の郊外住宅地化や、日本全体の工業化の流れを汲んで、港湾都市に変化していった。大正期には川崎商船学校の創設や、護岸工事が進められた。さらに昭和二（一九二七）年の「神戸市都市計画街路に関する件」による都市計画、あるいは室戸台風や阪神大水害といった災害の影響により、地主は耕作地を小作に出さず、宅地や工業用地として提供する。

そして、深江は港湾都市であるがゆえの特徴的な歴史を抱えることとなった。その例として戦時期における空襲被害が挙げられる。戦争に参加した日本は、各地に軍需工場を作ったが、深江にも二式飛行艇などを製作する川西航空機甲南製作所が建設された。それゆえ、本庄村は太平洋戦争の本土空襲の際に標的となり、多大な被害を受けた。

戦後は本庄村も神戸市に組み込まれ、復興政策が行われた。宅地化や団地の建設も進み、一九五〇年以降は、阪神間の住宅地として人気を集め、人口が急増するようになる。一九六九年には戦前からもとあった土地のみならず、「深江浜町」の埋め立てが完成して新しく工場が並び立ち、深江は戦前よりもさらに規模の大きな港湾都市となった。

これ以降も深江の変化は絶えない。先に述べた一九九〇年の出入国管理法改定にもなつて、ブラジルなど南米出身の日系人が急増し、深江でも外国人労働者の姿が見られるようになったことは、特に注目すべきである。出入国管理法改定以降、神戸を目指す日系ブラジル人も増加した。彼らの多くは深江周辺にある食品工場で、労働に従事している。深江南町の磯島公園にある阪神・淡路大震災（一九九五年）の慰霊碑には、南米系の外国人の名前が連ねられている。沿岸部には、震災以降も新たに食品工場が並び立ち、新しくアジア諸国からの外国人労働者も増加している。また、労働者だけでなく留学生も増加している。二〇一八年六月現在、東灘区全体で六〇三七人の外国人（うちブラジル人は一六八人）が暮らしており、外国人コミュニティを形成している。

### 3 現在の深江の街並み

最後に、外国人の多い「現在の深江」に焦点を当てて見ていきたい。深江の街を歩くと、外国人の多い街としての深江の景色に出会える。



写真2 深江浜町上空写真

以下では、そのうちのいくつかを紹介したい。

#### 東灘日本語教室

阪神・淡路大震災をきっかけに、日本に住む外国人をもっと理解し、支援しようという動きが強まった。この日本語教室は、平成一〇（一九九八）年、東灘区の深江地区に多く暮らしている、日系ブラジル人やペルー人の支援をするために設立された。

現在は、日系人のほかに、東灘区に住む中国人やフィリピン人、教室の近くにある神戸大学海事科学部の留学生など、約六〇名が通っている。大人向けの日本語教室と、日本語の苦手な、外国にルーツを持つ児童生徒を対象にした、日本語



写真4 東灘日本語教室

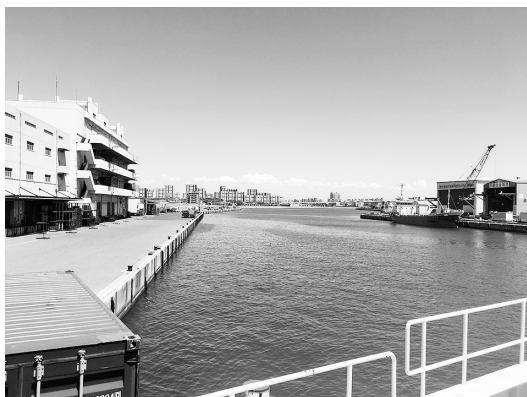


写真3 2018年現在の深江の景観  
沿岸部には食品工場が並び立つ。



による教科学習教室を実施している。

### 外国の食料品店・飲食店

労働者とその家族も含めて長期定住する意識が高まると、特定の国の文化に特化した食料品店や飲食店が登場することを、エスニック・コミュニティの形成と呼ぶ。このように、工場等での労働だけでなく、同郷出身者向けの営業を行う人々が出現していると、移民定住の段階が成熟していることの指標ともなる。深江では、南米を中心とした国の店が目立つ。

### 【参考文献】

大久保武『日系人の労働市場とエスニシティ―地方工業都市に就労する日系ブラジル人』御茶の水書房、二〇〇五年

小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会―群馬県



写真5 ブラジル食料品店



写真6 ペルー系のレストラン「インカ」の文字が確認できる

## 入館者9万人は灘小学校児童

1月29日に、史料館の入館者が9万人に達しました。1981年2月開館以来39年目です。9万人目の入館者は、神戸市灘区の神戸市立灘小学校3年生のみなさん（51名）です。当日、道谷卓副館長より「来館九万人の証」と記念品を贈呈しました。



（神戸大学文学部芸術学専修生）

太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房、二〇〇一年

梶田孝道『外国人労働者と日本』日本放送出版協会、一九九四年

梶田孝道、丹野清人、樋口直人『顔の见えない定住化 日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、二〇〇五年

梶原久美子『神戸市東灘区における日系ブラジル人コミュニティを考える』関西学院大学 社会学部紀要 九〇号、二〇〇一年

丹野清人『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会、二〇〇七年

法務省ホームページ 在留外国人統計 [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)